

入道の降参

雨 情

むかし或所に山王丸と言ふ強い少年が
 平常遊ぶのにも山へ行つて大きな松の木を根引き
 にしたり大きな石を谷へ轉がし落したり或時は又
 熊や猪なぞと相撲を取つたり、狼や狐なぞと馳け
 くらをしたり、狸や貉や猿なぞを苛め散らして俺
 一人か山の犬將軍だと威張つて居りました。
 或日山王丸は例の如く山へ遊びに行きました、
 其日は何處した事か熊も猪も狼も狐も何處へ行つ
 たか居ない、で遊び友達が無いので倦屈しました
 ものですから。

「ヨシ、熊や猪や狼等は皆と相談して俺を一人
 ばつちにして何方へか遊びに行つて仕舞つたのだ

な、今に酷い目に遭はせて遣るから見ろ。
 と大變に腹を立て、居ります所へ狐が藪の中から
 のぞく出て参りました。

山王丸はそれと見るより。

「こら其方は狐か。」

「ハイ、狐で御座います。」と狐は伶俐な獸です
 藪の蔭に隠れて、山王丸が眞赤になつて怒つて
 るのをチャント見て居りました故、茲で一つ熊や
 猪共を悪い者にして自分が獸類の王になつて遣
 らうと悪い心を出したのでありました。

「其方は熊や猪や狼共と相談して俺を困らせにか
 かつたな。」

「何う致しまして私はそれ所では御座いません、
 今朝方、熊殿や猪殿や狼殿なぞが相談をしまして
 今日は一つ山王丸殿に倦屈させて困まらせて遣る

やうに皆が遠くの山へ遊びに行くんだからお前も一所に來いと申しますから、私はそんな真似をしては山王丸様に濟まないから嫌だと申しますと大層私を罵つてその儘何方へか數多で行つて仕舞いました。

と、さもく本統らしく言ひましたので、山王丸も真だと思ひましたから。

『其方は狐であり乍らも實に感心だ、それに引き換へ不埒千萬の奴は熊や猪、今に歸つて來たならヨクく酔い目に遭はせてやる。』

と山王丸は加々怒つて居ります所へ、そんな事とは少しも知らないから熊や猪や狼や狸や猿共が平氣でゾロく歸つて來ますると、山王丸は驅けて行つて第一番に熊の頭を力まかせに撲り付けたから熊は堪らない、目を廻して仕舞つた、さうする

と猪や狼等は此方へウロく彼方へウロく狼狽して居る、山王丸は大きな聲をして。

『コラ、其方達は逃げると命が無いぞ。』

と言はれたので、吃驚して一同其處へ平伏して仕舞つた。

山王丸は此有様を見まして。

『其方達は何故、此山王丸を困らせやうとかゝつた。』

『そんな事は少しも存じません。』

と一同は心の中で狐の奴め何にか嘘を言つて山王丸を怒らせて自分ばかり褒められやうと計つたなと思ひましたから猪を始め一同が狐の方を見ますると狐は眞青に成つてブルく慄へて居ります。すると山王丸は狐を指して。

『其方達は嘘を言つても駄目だ、この狐が何によ



りの證人であるぞ。

これを聞いて狐は驚いた、若しも山王丸に嘘を言つたのが露れたら、それこそ自分の命が無い、何んでも今の内に逃げるより外に致方がないと其儘何方へか逃げて行つて仕舞いましたので山王丸も始めて狐に偽られたと悟りましたから、今度は又狐の狡猾を憤つて、いよゝゝ狐征伐となりましたさて山王丸は熊、猪、狼を始めと致しまして其他狸、貉、猿、等を牽き連れて山から山、谷から谷の隅々まで残りなく狐のありかを探しましたが影も形もありません。

さうする内に太陽も西の空へ落ちて夕暮となりましたので、又明日探すとも今日は是れで歸らうと山王丸を始め元來た山道をだんゝ辿つて來ますると、直ぐ向ふの山の麓に大入道が突立つたまゝ、

大きな口をアングリ開いて笑って居るのを、負ける嫌いの山王丸が見付けたから堪りません。

『コレ、向ふに居る怪物は何者だか生捕って仕舞え。』と下知をしますと。

直ぐさま熊や猪や狼共はそれ、身仕度をして入道の傍へ近寄りました。

眼は金色の星の如に輝いて、口からは焔の紅の如に燃ゆるばかりの舌を出して、その恐ろしさと言つたら例へやうがありません。所が山王丸を始め一同が縦横無盡に飛び込んで行くと、思つたよりも弱く忽ち入道は逃げだしました、それ逃がしてはならないと後追ひ驅けて苦もなく藤蔓を以て縛つて仕舞いました。

さうすると入道は、『降参した許して〜。』と泣き聲出して頻りに命乞をします。

山王丸は『コレ其方は怪しからん奴だ何者だか白状しろ。』

すると入道はブル〜戦え乍ら。

『實に申譯が御座いませぬ、私は先刻の狐で御座います、假りに入道に化けまして貴方様方を驚かさうと思ひました所、却つて生捕にしたら面目次第も御座いませぬ、何卒命ばかりお助け下さい。』これを聞いて、一同寄つてたかつて入道坊主の衣を脱かせて見ますと果して一疋の狐でしたから皆々呆れ切つて仕舞いました。

山王丸も呆れ切つて、怒つては見たもの、致方はなし、殺した所で何の益もなし、寧ろ勘忍して遣つたならば幾ら狡猾い狐でも、何日か役に立つ事もあるだらうと其儘許して遣りました。

すると狐は大層喜んで、態で山王丸の家臣になつ

て克く忠實を盡しましたとさ。めでたし〜

蛙遊ひ

これは、女子高等師範の附屬幼稚園の子供等がやつて居るのを見ましたのですが、次の歌を歌つてやるのです。

お池の蛙は

くわっ~~~~~

何というてなく

くわっ~~~~~

雨ふれ〜とて

くわっ~~~~~

ふるまで鳴くのよ

くわっ~~~~~

(共益商社幼稚園唱歌)

先づ七八人の子供が輪を造つて丸くなると 二三人の子供が真中に這入る。週りの輪が池で、中の子供が 蛙なのです。そこで 週りの子供が 右か左かへぐる〜回轉りながら『お池の蛙は』と

歌ひ出すと 中の子供は こいで跳びながら、『くわっ~~~~~』と歌ふ、又週りの子供が『何といふて鳴く』と歌ふと、中で『くわっ~~~~~』と歌ふ、此通りにして 上の句を週りで歌へば 下の句を中で歌つて 廻ったり跳ねたりするのです。

考へもの

●前號の解

(一) 10-9=1=田
(二) くるま

●この次は

(一) 十七を三分して魚の名一つ
(二) 十一を二分して魚の名一つ